

《書 評》

Debbie Challis, *From the Harpy Tomb to the Wonders of Ephesus: British Archaeologists in the Ottoman Empire 1840-1880*

London: Duckworth, 2008, pp. xi+211.

阿 部 拓 児

古代ギリシア史家が主として研究対象とする東地中海地域は、今日は大小さまざまな国家が成立しているが、かつてはその大部分がオスマン帝国の領土であった。1453年にコンスタンティノープルを落とし、最盛期をむかえたオスマン帝国は、バルカン半島、小アジア、レヴァント、北アフリカを支配下に置いていた。しかし、19世紀に入るとオスマン帝国は次第に支配力を失っていき、1829年にギリシア本土が独立した後は、1878年にバルカン半島が、第一次大戦までには北アフリカが帝国領から離脱していった。オスマン帝国が第一次大戦の敗戦国となると、最後に残った領土である小アジアの上に、後継国家であるトルコ共和国が成立する。

19世紀は、オスマン帝国が領土縮小と同時に、西欧列強にたいする発言力を失っていった時代でもある。この時期、大英博物館のパルテノン・マーブルやベルリン・ベルガモン博物館のゼウス大祭壇のような、多くの美術的価値の高い考古遺物がオスマン帝国外へと持ち出されていった¹⁾。では、これらの遺物はそれぞれ、どのような経緯で発掘されたのか。発掘品はどのようにして欧米の博物館に収められ、展示されたのか。また、それらを見た当時の人々は、どのような反応を示したのか。これらの疑問にたいし、本書はヴィクトリア朝時代（より正確には1840年から1880年。したがって、それ以前にオスマン帝国から独立したギリシア本土は、基本的に考察の対象外となる）の考古学者とイギリスを中心に、論じていく。

著者、デビー・チャリスは現在、ロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジ付属のペトリ・エジプト考古学博物館に勤務するかたわら、フリーランスで著述や講演活動をおこなっている。本書は、彼女がロンドン大学パークベック・カレッジに提出した博士論文を下敷きに、執筆されている。

本書は全体で3部、8章から構成されている。各章のタイトルと簡単な内容は以下の通りである。

第1部 「小アジア——リュキアとカリア」

第1章 「リュキアの墳墓」1840年代前半のチャールズ・フェローズによるリュキア発掘史

第2章 「博物館にて」発掘された遺物が大英博物館に持ち込まれ、展示される過程

第3章 「マウソロス廟とライオン」1850年代半ばのチャールズ・ニュートンによるカリ
ア発掘史

第2部 「北アフリカ——カルタゴとキュレネ」

第4章 「ディドを求めて」1850年代後半のネイサン・デイヴィスによるカルタゴ発掘史

第5章 「ベドウインと廃墟」1860年代のロバート・マードック・スミスとエドワード・
ポーチャーによるキュレネ発掘史

第3部 「イオニアのギリシア——エフェソスと小規模の発掘」

第6章 「エフェソス——長い発掘」1860年代のジョン・タートル・ウッドによるエフェ
ソス発掘史

第7章 「ディレクタントの発掘」プリエネ、ロドス、サルデイスの発掘と1870年代に小
アジア考古学の新勢力となったドイツ

第8章 「キプロス周遊」オスマン帝国領でありながら実質的なイギリス領土となって
いったキプロスの発掘事例

本書の意義は何よりも、類書を見ないという点にあるだろう。19世紀にオスマン帝国領を旅行した西洋人たちの記録を読み解くという研究は、ほかにも見出せるが²⁾、本書は考古学者の活動に限定することにより叙述をシャープにしながらも、現在の小アジア古典考古学を考える上で重要な、さまざまな視点を提供する。以下、評者の関心にしたがって、3つの軸（考古学のプロ化、大英博物館の戦略、オスマン帝国の反応）から本書の内容を整理したい。

(1) 考古学のプロ化

19世紀は考古学が、組織的にも技術的にもアマチュアからプロへと発展する段階にあった。本書は一次史料として新聞、手紙などのほかに、主として考古学者たちが発掘後に出版した報告書を用いている。しかし、これらの報告書は、今日のような客観的で無味乾燥な叙述ではなく、ときとして日記の体裁を取り、発掘とは直接関係のない個人的な体験にも言いおよぶことがあった。その点ではむしろ旅行記とも呼べる内容であり、なかには後続の考古学者の参考になるように携行品の一覧（ムスリムにメッカの方角を聞かれた場合に必要となるコンパスなど）が付された、ガイド・ブックのような報告書も見出せる。それゆえ、著者チャリスはこの時期の考古学者を、「旅行＝考古学者 traveller-archaeologist」という複合語によって括っている。

「旅行＝考古学者」とはどのような人物であったのだろうか。本書で最初の「旅行＝考古学者」として位置付けられているフェローズは、1838年から1843年にかけて、4度にわた

り小アジアを訪れた。そのうち、最初の2回は実際の発掘をとまなわない「視察」であり、個人旅行であった。3回目の訪問の際には、発掘許可にかんするスルタンの勅令を大英博物館の協力によって取得し、遺物の持ち出しには海軍の戦艦の利用を認められたが、期待していた資金的な援助はまったくなく、発掘にかかった経費は、ジェントルマン階級出身であったフェローズの個人資産によってまかなわれた。このように国家の援助を受けつつ、特別な訓練を受けていないアマチュアの考古学者個人が主体となって発掘するというスタイルが、この時代の考古学の特徴であった。例えば、エフェソスのアルテミス神殿を発掘したウッドは、イズミル・デニズリ間の鉄道敷設に携わっていた技師であったし、同時期にキプロスを発掘したラングは銀行家であった。また、スミスとポーチャーによるキュレネ発掘は、最初から個人資金によって計画されたものであった。

このようなアマチュア考古学者の活動でもっとも有名な事例は、1870年代のシュリーマンによるトロイア・ミュケナイ発掘であろう。もちろんシュリーマン自身はイギリス人ではないが、すでにシュリーマン型の考古学者を受け入れる下地ができていたイギリスでこそ、彼は本国以上の人気でむかえられたというのは、当時の古典考古学にたいする英独間の接し方の差を示す、興味深い現象である。しかし、その後の考古学のあり方に影響を与えたのは、シュリーマンよりもむしろ彼の辛辣な批判者であったエルンスト・クルツイウスであり、彼の指揮下、500人体制でおこなわれたオリュンピアの発掘は、考古学が個人の時代から組織の時代へと移っていったことを示していた。やがてイギリスでも、1870年代後半より the British School at Athens や the Society for the Promotion of Hellenic Studies のような専門的な学会が立ち上がり、考古学はプロの時代へと移っていくことになった。

技術的な発展については、1850年代のニュートンによるカリヤ発掘が画期となっている。ニュートンは発掘チームのメンバーに技師、建築家、写真家のような専門技術者を入れ、クレーンを使った大掛かりな発掘や遺物出土地のマッピングなど、現在の考古学につながるような手法を早くから取り入れた。19世紀前半に登場した写真機については、すでにフェローズが試験的に用いていたものの、実用するにはいたっていなかった。これを考古学の現場に本格的に導入し、それまでの肉筆によるスケッチと並ぶ記録媒体としたのもニュートンであった。ただし、ニュートンはオクスフォード大学で教育を受け、発掘前にも大英博物館の学芸員を勤めるなど、本書があつかう「旅行＝考古学者」のなかでは、例外的に専門的な知識を持ったプロの考古学者であった。ニュートンは発掘報告書でも、ほかの「旅行＝考古学者」と比べ、客観的な叙述を目指しており、自身の発掘が終了した後も大英博物館ギリシア・ローマ遺物局の主任学芸員として、その後の発掘に隠然たる影響力を発揮していく。彼が導入した手法のいくつかは継承されながらも、しかしその後の「旅行＝考古学者」による調査には、盗掘まがいの発掘や捏造事件も消えていなかった（例えば、1860～70年代のラングとチェズノーラによるキプロス発掘）。本書があつかう話題は多岐にわたるが、骨子を抜き出すとするならば、以上のような内容になるであろう。

(2) 大英博物館の戦略

イギリスに運び込まれた考古遺物は、主として大英博物館に納められることになった。しかし、19世紀の大英博物館は、現在はサウス・ケンジントンにロンドン自然史博物館として独立している自然科学部門が同居していたため、慢性的な展示スペースの不足に悩まされていた。またこの時期は、従来のディレクタントな（あるいはピクチャレスクな）展示方法から、より学問的な意味を求める展示へと移っていく、博物館の変革期でもあった。古代美術の分野では、ギリシア彫刻がやがて今日の西洋美術につながっていくという、発展史観（「芸術の大いなる鎖」）に基づいた展示が採用されていった。このような状況のなか、限られた展示スペースを獲得するためには、ネレイド・モニュメントやマウソロス廟を飾っていた彫像など、必ずしもギリシア芸術の枠内だけでは説明できないような遺物も、古典期ギリシア芸術の真髄とされたパルテノン・マールとの比較から、いかに「ギリシア的」かが強調される必要があったという。これは、20世紀後半まで続く、小アジアの「ギリシア化」議論にもつながる、重要な指摘であろう。

(3) オスマン帝国の反応

「旅行＝考古学者」たちが遺跡を発掘し、遺物を持ち出すためには、スルタンの許可勅令が必要であった。この許可がスムーズに振り出されるかどうかには、当時のヨーロッパ列強とオスマン帝国との国際関係が重要であった。例えば、ニュートンのカリア発掘に先立っては勅令が容易に下されたが、その背景には英仏との連合でオスマン帝国がクリミア戦争に勝利した直後であったという政治的事情があった。また、1870年代のベルガモン発掘の際、ドイツにたいし例外的に寛大な措置がとられるのも、当時のオスマン帝国の反英・親独路線が影響している³⁾。しかし、考古学におけるオスマン帝国とドイツの蜜月は長くは続かず、シュリーマンのトロイア発掘とベルガモンのゼウス大祭壇移設は、オスマン帝国に遺物流出の危機感を引き起こした。オスマン帝国は1874年と1884年に遺物の持ち出しを規制する法令を制定し、自前で遺物を収集し、帝国博物館（後のイスタンブル考古学博物館）に保管するという路線を採るようになった。

しかし、上述のようなオスマン帝国の反応に割かれる本書の紙幅は圧倒的に少なく、本書は全体として発掘者側の視点から描かれている。参考文献表にもトルコ語文献は挙げられておらず、管見の限り、トルコ人研究者による文献も1、2点が確認できるのみであった。オスマン帝国側からの視点を補うには、例えば、スルタンの勅令の分析が有益ではなかろうか。現在、発掘許可の勅令のオリジナルは残っていないが、パルテノン・マールの持ち出しにかんする勅令のイタリア語版と考えられている文書は公表されている。この史料から勅令の意義について分析されれば、当時の発掘をめぐる駆け引きの、より立体的な像が浮かび上がってくるであろう。また、本書でふれられている、19世紀後半に生まれてきたオスマン帝国のイスラーム以前の過去にたいする関心は、やがてトルコ共和国初代大統領ケマル・

アタテュルクが考古学をナショナル・アイデンティティ涵養にとって重要な学問として奨励したことを経て、20世紀小アジア考古学界におけるトルコ人研究者の活躍へとつながっていく⁴⁾。本書は1880年代に考古学がプロ化時代を迎えたところで閉じられているが、評者はこれにやや唐突な印象を受け、ここで述べたようなその後の状況が、展望のような形で示されていることが望ましいように思われた。

以上、評者の関心にしたがって、本書の内容を整理してきた。しかし、ここで紹介することはできなかったものの、本書を彩るエピソードの数々は、古代ギリシア史家だけではなく、近代オスマン帝国史研究者にとっても興味深いものだと思う。「旅行＝考古学者」たちが記録している地元民との接触の模様、例えば、イギリス人たちが遊ぶクリケットや、当時最新であったコルト社の自動回転式拳銃にたいするトルコ人たちの好奇心、そして現地雇用の発掘労働者内での、トルコ系住民とギリシア系住民の軋轢などは、当時のオスマン帝国農村社会と「西洋」にたいする彼らの態度を知る上でも、貴重な情報となるであろう。また、考古遺物収集にむけた大英博物館の戦略や、展示された考古遺物を見たロンドン市民の反応などは、本来は近代イギリス史研究者の考察対象でもある。そして何よりも、発掘資金を目当てにした盗賊団の襲撃や、労働者間で発生した殺人事件（発掘の過程で死体が発見される）など、「旅行＝考古学者」たちのスリリングな体験談は、読み物としてわれわれを興奮させてくれるであろう。

註

- 1) パルテノン・マーブルがオスマン帝国から持ち出され、大英博物館に納められた経緯については、朽木ゆり子（2004）『パルテノン・スキャンダル—大英博物館の「略奪美術品」—』新潮社、に詳しい。
- 2) 例えば、R. Schiffer (1999), *Oriental Panorama: British Travellers in 19th Century Turkey*, Amsterdam.
- 3) 1830～90年代にかけての、英・独・露をめぐるオスマン帝国の外交政策の変遷については、小松香織（1989年）「アブデュル・ハミト2世と19世紀末のオスマン帝国—「エルトゥールル号事件」を中心に」『史学雑誌』98-9, 40-82頁、による整理が有益。
- 4) A.M. Greaves (2010), *The Land of Ionia: Society and Economy in the Archaic Period*, Oxford, 32-33.